

Title	新館建築の思い出
Author(s)	金井, 孝
Citation	静脩 (1999), 臨時増刊号(1999)100周年記念: 19-20
Issue Date	1999-11
URL	http://hdl.handle.net/2433/37849
Right	
Type	Article
Textversion	publisher

閲覧機の一つを選ぶのにも心を砕き、館員の意見を取り入れながら館内外の整備に努めた。

次に「図書館運営費」の確保は、新しい図書館の命運にかかわる重大事であった。建物規模の拡大と設備の充実、さらに図書館の果たすべき諸機能の整備充実に伴い、従来にない図書館活動が展開されるので、それに見合った多額の運営費を必要とすることは必定である。高村館長ご就任直後の昭和57年4月からこの問題に取組み、昭和58年4月開催の京都大学評議会が昭和58年度の歳出予算配分方針を決定するに際し、新図書館の運営費の増額分に対し、全学的見地に立った予算措置を講じていただくことが決定され、新館が竣工する昭和58年度以降の図書館に対する予算配分の基本方針が確定した。これらのことについては、稿を

改めて語りたいことがある。

昭和59年4月9日、新しい図書館システム、サービス体制の下で図書館は全面開館し、多数の入館者で活みなぎる日々が始まった。「京大の館員の目が輝いている」とは、当時の東京大学図書館長裏田先生から頂戴したお褒めの言葉である。

その後も図書館業務の電算化など、西原館長の下で図書館機能の充実を目指す館全体の取組みが続き、新しい図書館の形が整えられた。林先生・高村先生・西原先生三代の館長の下で全館員が奮闘した図書館づくりは、大学の将来を見越した歴史的な大事業であった。

(まつだ よしひろ：元附属図書館総務課長
現財団法人京都大学後援会事務局長)

新館建築の思い出

金井 孝

「京都大学の長い間の夢の一つが、美しい装いと豊かな機能をそなえた図書館として、いよいよ開館の運びとなりました。まことにご同慶にたえません。読みたい本がほしいと思う時に手に入り、希望の文献が手際よく検索でき、書庫内で自由に拾い読みして思わぬ本や文章と出会い、妨げのない環境で読書と思索にふけり、また分野を越えた学問の交流の場が提供される、大学人のこんな夢を満たせる図書館でありたいとの希いが、新しい図書館には籠められております。」昭和59年3月21日、新図書館の開館記念式における高村仁一先生の式辞はこう始まっている。式辞の草稿は、松田栄博総務課長が熱き想いをこめて作成した。関係者一同がこの図書館に託した理念や施策にはじまり、新館建設にいたる経緯、建物の規模、特色を述べ、各方面に対し謝意を表明する、かなりな長文である。

前日も遅くまで、館長お得意の「夜道に日は暮れず」という科白が聞ける迄、文案を巡って鳩首凝議が続いた。「ご同慶にたえない」は第三者の言葉で、当事者が言うのはおかしいと言

い張った私に、「慶びを同じうするのだから」これでいいのだと応えられた先生のお顔が、今も目に浮かんでいる。起草者の文章を大切にする心配りと、全員でこの慶びを共有したいとのお気持ちが如実に窺われる温容であった。

少し笑みをたたえて、ゆっくりと、昨夜最後の仕上げをした文章と一言一句違わず、句読点までが見えるようにご挨拶が進み、関係者の名を列挙し謝意を述べられる先生の手には、草稿は無かった。様々な数値や固有名詞を含む、長い文章を完全に記憶されるため、昨夜は睡眠時間を削られたに相違なかった。すべてを脳裏におさめて式に臨むという、先生一流の誠意の表現である。図書館の新営に関した全ての人々、式辞中には言及されていない「身内」である職員や、炎天下に汗したアルバイトの学生一人一人を含む全員に対する感謝の表現でもあった。息をつめて、自分たちの夢が、肉声となって、語られるのを聞いた。涙滂沱であった。

15年たった今、改めて読み返して見ると、この式辞には新しい図書館が目指したすべての事

柄や、これに携わった人々の熱気が凝縮されていることがわかる。新館建設に関ったものには、一読あの日々が甦る美しい文章である。

京都大学附属図書館の新営は旧館の取り壊し、現地建替えと言う厳しい条件のもとに行われた。旧館を残したままでは、資格面積から旧館分を差し引いた、比較的小規模な新館しか建設出来ないことから、将来を見通し、あえて選択した厳しい道であった。建物の取り壊しから新館の完成迄のほぼ3年にわたる期間、利用者の不便を最小に止めることを至上命令として、約50万冊の蔵書の殆ど全てを利用可能な状態で学内各所に仮移転すること、開架図書室は改装した法経第一教室に移し、一週間以内に再開すること等々が求められた。この無理難題とも見えた課題も全職員の「火事場の超能力？」と、学内各部局のバック・アップによって、無事乗り越える事が出来た。次々に困難な場面に遭遇

した職員が、日常業務では隠されていた能力を発揮し、緻密さが要求される事には緻密に、素早く対応すべき事には素早く対応する様を目の当りにする、驚きと感動の日々であった。学内の所々・方々に分散・移転した図書を、日に2回集配する職員が、雨の日、我が身は濡らしても本は濡らさぬようしっかりと抱え、傘を傾けて歩いていた姿にこの日々が象徴されている。

昭和59年3月、卒業式当日、一度も新図書館を使うことなく、仮の閲覧室で不自由な思いをさせた卒業生に、お詫びの意をこめ、新図書館を開放した。御両親共々館内を回り、思い思いに記念撮影をする人々の中に、退館する際「こんな図書館が出来るのだったら、留年すればよかった」ともらした卒業生があった。新図書館に対する最高の賛辞であった。

(かない たかし：元附属図書館閲覧課長

現流通経済大学図書館図書課長)

新館建築中の閲覧業務

井 狩 らく子

附属図書館閲覧業務100周年を迎えられ、おめでとうございます。

昭和55(1980)年7月附属図書館新営の概算要求が提出され、10月予算内示、翌年正式決定という大転換期の昭和55年5月、私は閲覧課閲覧貸付掛長を命ぜられました。以来、新営図書館業務の機械化等様々な経験をさせていただきました事に改めて感慨を深くしております。

程なく、職員の新営と、仮移転のワーキンググループが発足し、私は後者に属し、昭和56年8月1日から9月にかけて、その後の114日間の仮移転作業実施の為の計画・準備が始まりました。

閲覧貸付掛の最大の課題は、閲覧室と、利用可能な資料の移動計画等でした。

開架閲覧室は法経第一教室に決定しました。閲覧席200席、開架図書約2万8千冊(参考図書8千冊：参考掛)の書架設置、その他の移動

計画・準備が必要でした。古き良き時代の机と椅子は残念乍ら撤去され、決してすわり心持が良いとは云えない机・椅子が設置されました。開館してみると、9時前から学生は待っていてくれ、お互いに不自由を忍んでの利用だったと思いますが、日常的に満席でした。

利用対象の資料として、本館書庫の約27万冊の図書・雑誌の移動が当掛の担当でした。過去の利用統計から、利用率の高いものは法経新館地下書庫へ、漢籍関係は東洋学文献センターへ、利用率の低い資料は旧書庫等へと配架する為の結束準備、出口と配架先の柵番張り、配架後の点検等、猛暑の中連日行われました。ほぼ過不足なく配架は完了しました。利用可能な書庫内図書の利用は、1日2回対応していました。雨の日も、風の日も、冬の雪降る日もリヤカーにポテを積んでの作業でした。特に製本雑誌の利用が多い時、担当者は大変でした。経済学部